

RH850ファミリ用Cコンパイラパッケージのご使用上のお願い

RH850ファミリ用Cコンパイラパッケージ CC-RHの使用上の注意事項を連絡します。

1. アセンブリ命令のオペランドに即値を指定した場合の注意事項 (No.2)
2. ラベルの定義と参照が同一アセンブル単位にある場合の注意事項 (No.3)
3. アセンブリ命令のベース・レジスタ省略時の注意事項 (No.4)
4. 仕様外のアセンブリ記述時の注意事項(No.5)

注: 注意事項の後ろの番号は、注意事項の識別番号です。

1. アセンブリ命令のオペランドに即値を指定した場合の注意事項 (No.2)

1.1 該当製品

CC-RH V1.02.00

1.2 内容

アセンブリソース上でアセンブリ命令のオペランドに即値を指定した場合に意図しないコードを生成する場合があります。

なお、コンパイラが生成したアセンブリ命令は非該当です。

1.3 発生条件

以下(1)～(6)のいずれかを満たす場合に発生します。

- (1) ld、あるいはst命令のdispに16ビット幅より大きい即値を指定し、dispの下位16ビットが0である。

発生条件例:

st.w r10, 0xffff80000[r0]

- (2) prepare命令のimm1に16ビット幅より大きい即値を指定し、imm1の下位16ビットが0である。
- (3) mulu命令のimmに0x8000~0xFFFFの即値を指定している。
- (4) prepare、あるいはdispose命令のimm1に4の倍数でなく、かつ、128以上の即値を指定している。

発生条件例:

prepare r20, 0x83

- (5) mov、cmov、cmp、add、mulh、satadd命令のオペランドに分離演算子(LOW または HIGH)を使用し、その分離演算子の項が以下(a)~(b)のいずれかを満たす即値を指定している(注)。
- (a) LOWの場合、第4ビットが1である。
 - (b) HIGHの場合、第12ビットが1である。
- 注: 即値の最下位ビットを第0ビットとします。

発生条件例:

add low(0x10), r12

V1.01.00以前ではr12に-0x10が加算されますが、
V1.02.00ではr12に0x10が加算されます。

- (6) ld、st、set1、clr1、not1、tst1、movea、addi、satsubi命令のオペランドに分離演算子(LOWW、HIGHW、HIGHW1)を使用し、その分離演算子の項が以下(c)~(e)のいずれかを満たす即値を指定している(注)。
- (c) LOWWの場合、第15ビットが1である。
 - (d) HIGHWの場合、第31ビットが1である。
 - (e) HIGHW1の場合、第15ビットまたは第31ビットが1である。
- 注: 即値の最下位ビットを第0ビットとします。

発生条件例:

movea loww(0x8000), r0, r12

V1.01.00以前ではr12に-0x8000が格納されますが、
V1.02.00ではr12に0x8000が格納されます。

1.4 回避策

以下のいずれかで回避可能です。

- (1) 発生条件(1)～(3)の場合、アセンブラによる命令展開が正しく行われなため、意図しないコードとなります。
従って、ユーザー自身で命令展開したコードを記述してください。

回避策の適用例:

```
-----  
movhi highw(0xffff80000), r0, r5  
st.w r10, loww(0xffff80000)[r5]  
-----
```

- (2) 発生条件(4)の場合、imm1を4の倍数に丸めてコード生成する必要があるにも関わらず、丸めずにコードを生成します。
従って、ユーザー自身で丸めた値でimm1を指定してください。

回避策の適用例:

```
-----  
prepare r20, 0x80  
-----
```

- (3) 発生条件(5)～(6)の場合、分離演算子を使用せずに期待値を直接指定してください。

回避策の適用例:

```
-----  
add -0x10, r12  
movea -0x8000, r0, r12  
-----
```

1.5 恒久対策

次期バージョンで改修する予定です。

2. ラベルの定義と参照が同一アセンブル単位にある場合の注意事項 (No.3)

2.1 該当製品

CC-RH V1.02.00

2.2 内容

アセンブリソース上でラベル定義と、そのラベルに対する .extern疑似命令が同一アセンブル単位に記述されている場合に、アセンブルエラーまたはシンボルアドレスが不正になります。

アセンブル単位とはINCLUDE制御命令により挿入展開したアセンブリ命令も含み

ます。

なお、コンパイラが生成したアセンブリ命令は非該当です。

2.3 発生条件

以下(1)~(2)の全てを満たす場合に発生します。

(1) アセンブリソース上でラベルを定義している。

(2) そのラベルに対する.extern疑似命令を同一アセンブル単位に記述している。

発生条件例:

```
-----  
.extern _sym    -->(a)  
  nop  
_sym:          -->(b)  
  jarl _sym, lp -->(c)  
-----
```

(c)の分岐命令で_symの定義行(b)に分岐せず、(a)に分岐します。

2.4 回避策

.extern疑似命令を削除してください。

2.5 恒久対策

次期バージョンで改修する予定です。

3. アセンブリ命令のベースレジスタ省略時の注意事項 (No.4)

3.1 該当製品

CC-RH V1.02.00

3.2 内容

アセンブリソース上でメモリ参照命令のベースレジスタを省略した場合に、不正なコードを生成します。

なお、コンパイラが生成したアセンブリ命令は非該当です。

3.3 発生条件

以下(1)~(2)の全てを満たす場合に発生します。

(1) set1、clr1、tst1、not1、あるいはst命令のベースレジスタ[reg1]を省略している。

(2) (1)の命令のdispに分離演算子を使用している。

発生条件例:

```
-----  
st.w r10, loww(#_sym)  
-----
```

#_symによる参照のため、ベースレジスタに[r0]が指定されたものとみなします。

このときV1.02.00では分離演算子LOWWが無視されます。

3.4 回避策

ベースレジスタを省略しないでください。

回避策の適用例:

```
-----  
st.w r10, loww(##_sym)[r0]  
-----
```

3.5 恒久対策

次期バージョンで改修する予定です。

4. 仕様外のアセンブリ記述時の注意事項(No.5)

4.1 該当製品

CC-RH V1.02.00

4.2 内容

アセンブリソース上で式が記述できるオペランドにおいて、本来はアセンブルエラーとすべき記述がエラーとならない場合があります。

その結果、意図しないコードを生成します。

なお、コンパイラが生成したアセンブリ命令は非該当です。

4.3 発生条件

式が記述できるオペランドまたはオペランドの一部が、以下(1)~(4)のいずれかを満たす場合に発生する場合があります。

(1) 以下のいずれかの文字

*, /, +, -, <, >, &, ", |, ^, ~

発生条件例:

```
-----  
br    +  
-----
```

(2) 以下のいずれかの文字列

&&, ==, «, », (), ""

(3) ()の中に(1)~(2)の文字または文字列を含む文字列

発生条件例:

```
-----  
mov (&&), r10  
-----
```

(4) 項が空の分離演算子またはセクション集合演算子

発生条件例:

```
-----  
add    low(), r10  
-----
```

4.4 回避策

正しいアセンブリ記述に変更してください。

4.5 恒久対策

次期バージョンで改修する予定です。

[免責事項]

過去のニュース内容は発行当時の情報をもとにしており、現時点では変更された情報や無効な情報が含まれている場合があります。ニュース本文中のURLを予告なしに変更または中止することがありますので、あらかじめご承知ください。

© 2010-2016 Renesas Electronics Corporation. All rights reserved.